【編著書】Surgenor, D. M : Transport of oxygen and carbon dioxide. *in* Bishop, C. and Surgenor, D. M. (ed.) : The red blood cell ; a comprehensive treatise. 348, Academic Press, New York, 1964.

＊題名中に書名が出現する場合は、引用符“　”で囲みイタリック体を便用しない。

六　投稿原稿は、コピーを一部添付すること。原稿は著者校正の際も原則として返却しないので、手元にコピーを一部残すこと。

七　著者校正は、原則として原著・総説・研究ノート・広場・資料を対象とし、初校のみとする。校正は字句の訂正に留め、組版面積に影響を与えるような改変や、その他の組み替えは認めない。校正刷りの返送期日を厳守すること。期日までに返却されない場合は責了とみなす。

八　刷り上り五印刷ページ（四〇〇字詰原稿用紙で一二枚）までは原則として無料とし、超過分と図表製版の実費は著者負担とする。

九　論文別刷は五〇部単位とし実費で作製する。別刷希望者は校正刷第一頁の上方に部数を朱書すること。

一〇　原稿の送り先

〒一一三　東京都文京区本郷二丁目一―一
順天堂大学医学部医史学研究室内
日本医史学雑誌編集委員会

編集後記

▼一九九二年十一月、藤浪剛一先生（一八八〇～一九四二）の没後五十年祭が催された。先生は一九四一～二年日本医史学会の第四代理事長を務めた方で、『医家先哲肖像集』（一九三六）という名著がある。本業は今日でいう放射線科の教授だが、当時の慶應義塾大学では理学的診療科と呼んでいた。いかにも画像医学の専門家らしく、画像から医学の歴史を展開されたのである。第八代理事長の大島蘭三郎先生（一九〇八～）を医史学に引入れた恩師でもある。

この先生の経歴を追っているうちに、第三代理事長の富士川游先生（一八六五～一九四〇）への追悼文が出てきた。日本医史学会の一九四〇年当時の機関誌は『中外醫事新報』という名で今のより大きい菊判であった。その最後の号に載っていた。翌年、つまり藤浪先生が理事長になった時からA五判の『日本医史学雑誌』になっていったのである。もう五十年を越える歴史ということになる。

学会誌も時代と共に変っていく。最近でも表紙が色つきの絵になったり、編集方針や組み方など目立たぬ所にも変化があり、会員に受け入れられ、役に立つように努力を重ねている。

ここへ来てまた大きな変革が起きた。それは電算写植という印刷技術の進歩によるものである。ワープロ原稿の投稿が多くなったが、さらに進めてフロッピーでの投稿の時代に進んできた。それに合わせて投稿規定を検討中である。

（大村　敏郎）